

ラクイラ近郊フォッサ、サンタ・マリア・アド・クリプタス聖堂北壁装飾
—聖母晩年伝と終末思想—

桑原 夏子 フィレンツェ大学

2009年に起きた地震によってラクイラの町と文化財は壊滅的な被害を被った。その復興の途上において、イタリア南部ラクイラ美術に対する美術史研究者の関心は近年高まりを見せている。ラクイラは、フィレンツェとナポリを結ぶ街道のヴィア・デッリ・アブルツツィの中間地点に位置し、なおかつ山岳地帯を挟んだ西にはローマがある。フィレンツェ、ナポリ、ローマの美術から刺激を受け、ラクイラは豊潤な造形文化を熟成していたと再評価されているのである。

本発表ではラクイラ近郊フォッサにあるサンタ・マリア・アド・クリプタス聖堂北壁の聖母伝と故人像の問題を扱う。ラクイラ近郊オクレの領主モレル・ドゥ・サウルは、1280年頃に本聖堂の装飾を依頼し、南壁には創世記と7月から12月までの月々の労働図、内陣にはキリスト受難伝、西壁には《最後の審判》が描かれた。北壁は1349年の地震によって倒壊し、再装飾がなされたが、南壁と対応していたはずの1月から6月までの労働図は描かれず、聖母伝と墓に横たわる故人像が選択された。内陣側にヨアキム伝、マリアの少女期伝の4場面が、《受胎告知》と《キリスト降誕》は西壁側に、そして《聖母への死の告知》から《聖母被昇天》までの6場面の聖母晩年伝が壁面中央に描かれている。はじめに、聖母伝の真下に描かれた故人像の像主特定を行う。彼が北壁再装飾の注文主である可能性が高いからである。続いて北壁の画家の造形言語の分析を行う。先行研究はジョット派、ナポリ派、シエナ派の影響を指摘していたが、本発表では師と思しきラクイラの画家を特定することから始める。その上で1367-69年にローマで活動していたマッテオ・ジョヴァンネッティの造形言語が流入していることを新たに指摘し、以上の作業を通して北壁壁画の推定制作年代を提出する。

聖母の晩年の物語と天上における栄光化は、聖母を称え、聖母の体ごとの被昇天を支持する文脈で表されると説明されてきた。1290年頃のチマブーエによるアッシジ、サン・フランチェスコ聖堂上堂内陣壁画、1311年のドゥッチョによるシエナ大聖堂のための《マエスタ》が、聖母晩年伝図像の生成と普及に大きく貢献し、その説明の裏付けともなった。しかし、チマブーエ作品よりも制作年代が先行するトリエステ近郊ムッジャ・ヴェッキアのサンタ・マリア・アッスンタ聖堂中央身廊の聖母晩年伝は終末思想と関係づけられており、1290年代に制作されたミラノ近郊クレシェンザーゴ、サンタ・マリア・ロッサ聖堂内陣の聖母晩年伝は、審判者キリストと棺台に横たわる聖職者と共に描かれている。聖母の晩年主題は13世紀末から14世紀末にかけて特にフィレンツェやローマで墓碑彫刻の主題としても流布し、救済願望、終末思想と聖母晩年伝のつながりは一層深められていた。本聖堂の聖母晩年伝6場面それぞれの図像分析を行い、本聖堂の聖母晩年伝も終末思想の文脈で理解されるものと主張する。

(くわばら・なつこ)